

従属接続詞の談話モダリティと その英語教育における意義について

荻原 洋

(1999年10月19日受理)

On the Discourse Modality of Subordinate Conjunction and Its Implication in English Education

Hiroshi Ogihara

E-mail: ogihara@edu.toyama-u.ac.jp

Key words : Discourse, English Education, Modality, Subordinate Conjunction

はじめに

従属接続詞はその「従属」という名称のためか、主節の一部に過ぎないと考えられ、文内の問題として扱われていることが多い。例えばある中学校用英語教科書の解説編 (Teacher's Manual) には次のような記述が見られる。(東京書籍 NEW HORIZON 平成2年度改訂版2年生)

(1) 「副詞節の初出として *when*-clause を扱う。

(中略) *When*-clause を含む文について注意すべきことは、

1) Part1 では、*when*-clause がいわゆる主節の前に置かれる場合のみを扱うが、これは実際は主節の前にも後にも置かれる。これは一般に副詞節について言えることであり、*when*, *after*, (al) *though*, *until* などと *and*, *but* などと区別するうえでの重要な基準になるのである。

(中略)

2) *when*-clause とコンマ : *when*-clause と主節をコンマでくぎることについては一定の決まりはない。(中略) 一般的に言って *when*-clause が主節に先行する場合にはコンマを用いたは

うがよい。コンマを用いることによって *when*-clause と主節を比較的にはっきり区別することになり、読者によけいな負担をかけずにすむ。しかし、主節が先行する場合は、コンマを用いる必要はより少ないようである。これは *when* が主節と従属節の間にくるために、それ自体2つの節を視覚的に区別する働きをするからである。UE (Roberts. *Understanding English*) に従えば、*when*[*before*]-clause が主節に先行する [文を始める] 場合には、これは sentence-modifier であって、これと主節は音声的には休止で、視覚的にはコンマで、それぞれ区別される。*when*-clause が主節に続く場合は、これはたいてい verb-modifier であって、主節とこれとの間に、休止やコンマは置かれない。」(p.123)

この解説文の最後のところで、主節に先行する場合と主節に続く場合の *when* 節の働きの違いについて極めて簡単に触れられているが、これだけではどう気をつけたら良いのか分からない。というよりも、この前に、実際の指導上の注意として (音声面は別にして)、「...「～であったとき」とい

う日本語と比較して、when (～とき) が「～」の前にくる語順の違いに注意させたい。……」(同解説編 p.121) という一節があり、それを見る限り位置の違いは気にしなくて良い、という意図があるように思われる。when が初めて出てくる課での、実際に when が使われている例は次の三つである。(LESSON 6. Part1～2.)

- (2) a. When you were a boy, what did you want to be, Father?
b. When I was a little girl, I lived in a beautiful village.
c. What do you want to be when you grow up, Mike?

(2. a) と (2. b) は Part1 に、(2. c) は Part2 に、それぞれ出ている。

これらの解説と実際に使われている例文またその順番を見る限り、接続詞 when の働きは、ある文 (従節) を別の文 (主節) の一部として埋め込むことであり、それはあくまで文内だけの問題であるかのように見える。しかしこれは when のその他の働きを無視しているわけではなく、外国語として英語を学ぶ初学者 (日本の中学生) にとっては適切な配慮と言える。問題は、接続詞 when の働きに関する記述が、この先学習者の習熟度が上がっても、基本的にこのままである、ということである。

そこでこの小論では、接続詞 when の様々な働きとそれを司る原則を整理・概観し、学習者の習熟度に応じてその中からどのようなことを教えていったらよいのかを、探ることにしたい。

1. when の様々な働き：説明すべき事象

検証の過程を分かりやすくするために、従属接続詞 when の用法を次の二つに分けることにしたい。

- (3) a. when 節で述べられている状況・出来事が、主節で述べられている状況・出来事の生じる時を指定する場合。二つの状況はあ

る時点では同時に生じていると言える。
(以下「同時用法」と呼ぶ。)

- b. when 節で述べられている状況・出来事が、主節で述べられている状況・出来事より後に (ほぼ連続して) 生じる場合。(以下「継続用法」と呼ぶ。)

この二つの用法のそれぞれに二つずつの異なる具現形がある。同時用法では when 節が主節の前に来る場合 (4. a) と後に来る場合 (4. b)、継続用法では when の前にコンマがある場合 (5. a) とない場合 (5. b)、のそれぞれ二つである。

- (4) a. When I was 10 years old, my father died.
b. My father died when I was 10 years old.
(5) a. I was playing the piano, when there was a knock at the door. (Quirk, et al. 1985)
b. He was walking down the street listening to music on his headset when a car hit him. (Quirk, et al. ibid.)

(4. a) を同時用法 when 節前置型、(4. b) を同時用法 when 節後置型、(5. a) を継続用法コンマ型、(5. b) を継続用法無コンマ型、とそれぞれ呼ぶことにする。なお、ここでいう継続用法の when は、(6) のような関係副詞の when と見なすことも可能である。

- (6) a. I remember the day when my father died.
b. The best time of life is when we are young.

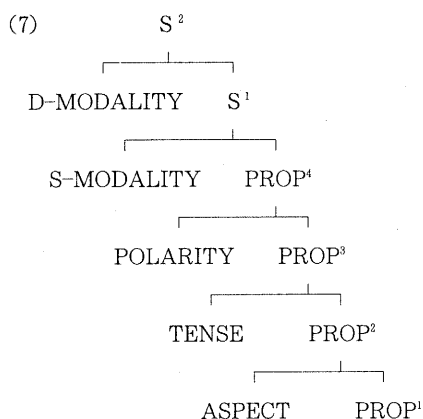
一般に関係詞と呼ばれるものの特徴は、関係代名詞であれ関係副詞であれ、接続機能と代用機能の両方を合わせ持つことである。「継続用法の when は and then とほぼ同様の意味を持つ」と多くの文法書に記載されているが、まさに接続機能を持つ and と代用機能を持つ then がそこに含まれていることがわかる。ただ、代用機能はそれ自体ある種の接続機能を内に有しているため、接続詞の when と関係副詞の when を明確に区別することは難しい。ここでは継続用法の when も接続詞として扱うことにする。

大切なのは名称ではなく、機能とそれを支える要因である。

上述の4つの型による区別は、かなり大雑把であるが、これらを中心に、whenの従属接続詞としての様々な働きを検証していくことにする。検証では、それぞれの型の特徴と、それをもたらしている要因に焦点を当てる。

2. 説明の枠組み

この小論では、基本的な説明の枠組みとして、中右(1984-6)で展開された「階層意味論」を採用している。この理論では、文の意味構造の基本的骨格として(7)のような階層性を持つ構造を仮定している。



最下層の PROP¹ が述語と項から成るいわゆる核命題であり、それに ASPECT, TENSE, POLARITY といった成分が付加されて命題 PROP⁴ が出来上がる。この PROP⁴ までは客観的な意味内容であり、それに主観的な意味内容であるモダリティが加わり、一つの文が形成される。モダリティとはその文の発話時(瞬間的現在時)における発話者の心的態度のことであり、それは文の命題部分を作作用域とする S (sentence) モダリティと、談話を適切に構成するために文間のスムーズな連結を確保することをその役割とする D (discourse) モダリティとに区別される。例えば、ある文の書き出しとして (8) のようなものがあったとする。

- (8) a. Conversely, ideally, our company should...
 b. 逆に、理想的には、私たちの会社は....すべきだ。

ここで、文の最初の“conversely/逆に”は前の文とのつながりを示す(確保する)働きを持っており、Dモダリティの例である。2番目に出てくる“ideally/理想的には”は、発話者の意見(主観)であり、その後に続く命題を修飾しているのでSモダリティである。最後の“our company/私たちの会社は”は主語であり、命題の構成要素である。Hallidayの用語を用いれば、前から順に、テクスト的機能(textual function)、対人的機能(interpersonal function)、概念的意味(ideational meaning)の一部、をそれぞれ担っているとも言える。

また、英語では一般に、文頭に置かれる要素はその文の主題、つまり伝達されるメッセージを理解する際の基本的枠組み、と見なされるが、その「伝達の枠組み」という意味において、例文(8)の始めの方に出てくる語句 Conversely, ideally, our company を全て主題とみなし、複合的主題(McCarthy, 1992)と考えることもできるであろう。本稿では、複合的主題という考え方に賛成しつつも、議論を簡単にするために、文頭の要素だけを主題と呼ぶことにする。

モダリティや主題は本来、談話の構造に関わる概念である。単一の文に関してもそのモダリティや主題を論じることが可能のように思われるが、いかなる文であっても、周囲の状況や先行する文脈と無関係に発せられることはありえない。その発せられる文がその時点において、広い意味での文脈に照らし合わせて、適切であることを保証するものがモダリティであり、主題である。

また、主題は、先に述べたように、発話者が情報伝達の枠組みとして自らの意志で選んだものであり、その意味で主観的であると言える。

Halliday (1967) では主題を “What I am talking about” と規定している。

従って、主題は、それが文中のどのような要素であろうとも、階層意味論のDモダリティであると言える。(8)の例で言えば、主題は Conversely

であり、発話者は「これに続く内容はそれ以前のものと反対の内容になっているので、そのように聞いて理解して欲しい」という願いを述べているのである。これはまさに、発話時における発話者の心的態度であり、主観的なものであり、さらには、それ以前の文（文脈）とその後に続く文との橋渡しをしていることが明らかなものである。英語の場合、語順が固定されているので、主語が文頭に来ることが多い。主語は明らかに命題を構成する成分であるが、文頭に来た場合は、(8)の *Conversely* の場合と全く同じ意味で、発話者の主観・心的態度を表す *D* モダリティの役割も果たしている。

以上をこの小論における基本的な説明の枠組みとする。

3. 説明

ここでは前節で述べた説明のための基本的枠組みを念頭に置き、先に述べた従属接続詞 *when* の4つの型について、その差異を中心に検討していくことにする。

3.1. 同時用法

同時用法の *when* では、従属節は主節の出来事・状態の生じる時を指定する働きをする。このことから、冒頭で紹介した教科書での扱いのように、従属節が主節の前に来ようと後に来ようと違いはないかのような扱い方をされている場合が多い。確かに (9) のように、二つの文を *when* でつなげたものだけを見ていると、そのように感じるのも当然と言えよう。

- (9) a. When I was young, I studied hard.
b. I studied hard when I was young.

しかし、この両者には明らかな違いがある。その違いを説明するために、自然な談話の構成の仕方といったことについて、考えてみる必要がある。

メッセージを効果的に伝達するためには、伝達の枠組みがしっかり構成されていなければならない。伝達の枠組みとは文頭の要素である主題のこ

とであるから、伝達の枠組みがしっかり構成されているということは、メッセージを構成する各文の主題が、目的に適うようなやり方で、きちんと選択され配列されている、ということの意味する。McCarthy (1992) よれば、選択の仕方にも配列の仕方にも、代表的な仕方がそれぞれ二つずつあるという。

配列の仕方では、一つは、(10. a) のように、連続する文の主題を同じものに統一する方法である。もう一つは、(10. b) のように、前の文の（主題以外の）要素を選び、それを次に続く文の主題として設定し、前の文とのつながりを確保していく方法である。

- (10) a. [主題ⁱ-陳述^j]→[主題ⁱ-陳述^j]→[主題ⁱ-陳述^k]
→[主題ⁱ-陳述^m]
b. [主題ⁱ-陳述^j]→[主題ⁱ-陳述^j]→[主題ⁱ-陳述^k]
→[主題^k-陳述^m]

また、主題となる語句の選択の仕方では、次の二つが、談話がきちんと一定の方向を向いて（方向づけられて）効果的な伝達が行われるためには、最も効果的であるという。

- (11) a. 時間や場所を示す標識語を主題とする
b. 主要な登場人物を主題とする

次の (12) は McCarthy (1992) で良い例として紹介されているものである。説明の都合上、一文毎に分け、記号をつけた。

- (12) a. Dear Joan,
b. I'm sitting here at my desk writing to you.
c. Outside my window is a big lawn surrounded by trees, and
d. in the middle of the lawn is a flower bed.
e. It was full of daffodils and tulips in the spring.
f. You'd love it here.
g. You must come and stay sometime;
h. we've got plenty of room.
i. Love, Sally.

前半の (c) (d) では、場所を表す標識が主題に用いられて読み手に空間的な方向づけが与えられているため、情報がスムーズに読み手に入ってくる。また、(d) の主題の一部には前文 (c) の要素が入っており、この二つの文のつながりも極めてスムーズである。後半になると、当事者である you や we が主題となっており、これらは伝達の枠組みとしては最も自然なものである。

これに対して、主題の選択や配列をきちんと考えないで構成したメッセージは、何を伝えようとしているのかピンとこないものが多い。例えば、

(13)a. Dear Joan,

- b. I'm sitting here at my desk writing to you.
- c. A big lawn surrounded by trees is outside my window and
- d. a flower bed is in the middle of the lawn.
- e. It was full of daffodils and tulips in the spring.
- f. You'd love it here.
- g. You must come and stay sometime;
- h. we've got plenty of room.
- i. Love, Sally.

この例では、前半の (c) (d) の文の主題が適切に選択されていないので、せっかく素敵な情景を描写しても読み手の頭の中にはスムーズにそれが入ってこない。そのため、後半の部分でその場所に招待されても行きたいという気持ちが起きにくく、全体としてピンぼけの内容になっている。一つ一つの文に問題がないにもかかわらず、全体として幼稚な感じを受けるのは、主題の構成に対する配慮が足りないからである。

このように、一つの段落の中で、それぞれの文が効果的に結び付けられるための鍵となるのが、各文の文頭に置かれる主題であるが、複数の段落から成るさらに大きな談話を考えたとき、今度は、各段落の先頭に置かれる文がその段落の主題となっている。これは主題文と呼ばれる。しかし次の引用からも明らかなように、各段落を効果的に結び付ける役割を実際に果たしているのは、主題文全体というよりも、主題文のさらにその先頭にある

主題である。(段落毎に番号をつけ、その先頭の単語に下線を引いた。また引用が長くなるのでところどころ省略した。段落2はセリフから始まっており他の段落とは性格が違うので段落7や11のように省略してもかまわないのだが、話の展開を分かりやすくするために残しておいた。)

- (14) 1. There was a knock at the outer door. It opened, and Mel Bakersfeld leaned in. (省略) "I was coming by," he told Tanya. "I can drop back later, if you like."
- 2. "Please stay." She smiled a welcome. (省略)
- 3. She watched him as he walked to a chair across the room. (省略)
- 4. She switched her attention back, and filled in a voucher, and handed it to the girl. "Give this to the taxi dispatcher, Patsy, and he'll send you home. (省略)"
- 5. When the girl had gone, Tanya swung her chair around to face Mel's. She said brightly, "Hullo."
- 6. He put down a newspaper he had been glancing at, and grinned. "Hi!"
- 7. (二人の会話 省略)
- 8. Mel laughed. (省略)
- 9. Tanya looked at him, inquiringly. (省略)
- 10. He hesitated, weighing conflicting claims, then reluctantly shook his head.
- 11. (二人の会話 省略)
- 12. Mel held the door open, and they went out into the bustling, noisy main concourse.
- 13. There was a press of people around the Trans America counter, even greater than when Mel had arrived. (Hailey, A. *Airport*. 1968. Bantam Books. pp.26-7.)

この引用部分の各段落の先頭の単語を見ると、先に (10) (11) で述べた主題の効果的な配列の仕方と選択の仕方が守られていることが分かる。小説のこの引用部分を含むくだりでの主要な登場人物は Mel と Tanya であるが、Tanya はこの前

のところで既に登場している。そして段落1で、もう一人の主要人物のMelがThere構文で場面に登場させられている。There構文の働きはまさにこのように、場面に新しいものを導入することにある。段落3, 4, 6~12はこの二人を主題としており、効果的な主題の選択の仕方(11. b)に合致している。注目すべきは段落5の主題Whenである。このWhen節は確かに主節の出来事の生じた時を指定する働きを持ったものであるが、だからといって、主節と従属節の順番を入れ替えた次のような文を段落5の先頭の文にして良いわけではない。

- (15) She(Tanya) swung her chair around to face Mel's, when the girl had gone. She said brightly, "Hullo."

(15)の始めの文の主題は主要登場人物のsheであり、主題の選択の仕方では問題はないように思われるが、段落5の役割はTanyaの同僚のPatsyを帰宅させMelとTanyaの二人だけの場面を作ることにある。各段落の先頭の単語だけを並べてみるとその違いが分かる。(16. a)はもともとの引用からの、(16. b)はその段落5を(15)に置き換えた場合の、主題の構成である。(段落2, 7, 11を除く。)

- (16) a. There-She-She-When-He-Mel-Tanya-He-Mel-There
b. There-She-She-She-He-Mel-Tanya-He-Mel-There

(16. b)を眺めただけでは、これといった状況の変化が感じられない。それに対して(16. a)では、Whenが、場面に何らかの変化が生じたということを読み手に感じさせて(注意を喚起して)いる。実際に(15)の文を元の文と入れ替えて全体を通読してみれば、ピンぼけの印象は免れない。文内のことだけを考えれば、従属節と主節の位置関係は、問題にはならないのだが、文間や談話ということを考えれば、大きな違いがある。主題の構成は、まさに発話者の主観の表明であり、時を表す

従属接続詞whenが文頭に置かれた場合は、主節の出来事の生じる時を指示するだけでなく、その場面の中に新しい場面や状況が生じたということを示す標識としての働きがあると言える。そして、どちらかといえば、後者の働きの方が主要な役割であるように感じられる。同様に、

- (17) In a small private lounge which was sometimes used for VIPs, the young girl in the uniform of a Trans America ticket agent was sobbing hysterically.

Tanya Livingston steered her to a chair.

"Make yourself comfortable," Tanya said practically, "and take your time. You'll feel better afterward, and when you're ready we can talk. (Airport.pp.22-3.)

- (18) The girl wiped reddened eyes with a large linen handkerchief which Tanya had given her. She spoke with difficulty, choking back more tears. "They wouldn't talk that way... somean, rudely...at home...not to their wives."
"You mean passengers wouldn't?"

The girl nodded.

"Some would," Tanya said. "When you're married, Patsy, you may find out, though I hope not. But if you're telling me that men behave like adolescent boors when their travel plans get crossed up, I'll agree with you." (Airport.p.23.)

(17)の下線を引いた文は、乗客の理不尽な振る舞いに興奮して泣いている女性スタッフに対して向けられた言葉である。ここでもまず話をする前に、興奮した状態から落ち着いた状態へと場面が変わることが必要であり、そういった場面の転換の標識としてwhenが文頭に置かれているのである。(18)の最初の下線部も同様である。この場合は、妻に対して理不尽に振る舞う夫がいるということは実際に結婚してみてもわかることなので、独身から結婚へという場面の転換がまず必要である。主節と従属節を入れ替えてYou may find out, Patsy, when you're married.としても意味は通じるが、

やはり場面の切り替えという点では when 節が最初にあるほうが読み手にとって理解しやすい。これに対して (18) の二つ目の下線を引いた文は、男性が乱暴な若者のように振る舞うことがあるとすれば、その一つには旅行のプランが駄目になった時などが入るだろう、というような意味であって、文脈のこの箇所で読み手に頭の中の場面を「男性客の旅行プランが駄目になった時」に転換をしてもらい、転換された新しい場面で何かを述べる、といった必要は全くない。主節と従属節を入れ替えて When their travel plans get crossed up, men behave like adolescent boors. とするとこの場合は話の流れが不自然な感じになる。

このように文頭の従属接続詞 when は、主題であり、発話者の主観の表明であり、談話の中で新しい場面の登場を示す標識である。この when に続く従属節の内容は、その新しい場面の説明であり、その場面に関して、後続する主節で何らかのコメントが加えられる。普通このコメントの部分が発話者の最も伝えたい部分であり、従って、語順を変更させるなどして、よりその部分に強調や焦点を当てることが可能であるが、場面を設定する部分にそのような特別な効果が加えられることは、本来焦点を当てたい主節部を相対的に「軽く」することになり不自然である。

(19)a. *When in came John, I was doing the dishes.

b. I was doing the dishes when (suddenly) in came John. (村田, 1982)

(19.b) は継続用法の例である。この場合は焦点は when 節にあるので、更なる効果をねらって when 節内で倒置がなされている。

同時用法の when 節が主節の後にある場合は、文脈により、when 節は旧情報とも新情報ともなれる。(20) は旧情報の例、(21) は新情報の例である。ここで興味深いのは、情報の新旧にかかわらず、文末の when 節内では語句の倒置などの現象は起こりにくい、という点である。(22) (23) を参照。(20)~(22) は村田 (1982) からの引用、(23) は筆者が英語母国語話者(複数)に確認した

もの、(24) は村田 (1982) が Hooper-Thompson (1973) から引用したものである。

(20) A: What did you do when John hit you?

B: I got angry when John hit me. 【旧情報】

(21) A: When did you get angry?

B: I got angry when John hit me. 【新情報】

(22) A: ...and at two o'clock suddenly in came John.

B: What were you doing at the time?

A: I was doing the dishes when he came in/
*when in he came. 【旧情報】

(23) A: When did you get angry?

B1: I got angry when John came in (suddenly). 【新情報】

B2: I got angry *when suddenly John came in. 【新情報】

B3: I got angry *when (suddenly) in came John. 【新情報】

(24) *We were all much happier when upstairs lived the Browns.

倒置をするということは、発話者が特別な情報伝達の枠組みを設定するということであり、それはすなわち発話者の主観の表れである。従って、文末の同時用法の when 節にそれが生じにくいということは、この型の when 節がモダリティを持たないということを示唆する。つまり、この型の when 節は主節の動詞句の内部に客観的命題の一部として存在しているのである。この点において、モダリティを有する文頭の同時用法の when と対照的である。これで同時用法の検討をひとまず終え、継続用法に進む。

3.2. 継続用法

最初に、継続用法について、いくつかの文法書にある用例とコメントを紹介すると、

(25) a. The last man was emerging from the escape tunnel when a distant shout signalled its discovery by the guards.

b. (= (5.a)) I was playing the piano, when

there was a knock at the door.

- c. (= (5.b)) He was walking down the street listening to music on his headset when a car hit him.

COMMENT: The more important information is given in the subordinate clauses,...The effect is to provide a dramatic and emphatic climax. (Quirk, et al. 1985)

- (26) I took some pictures of the square and of the children, who were enchanting. I was just going to walk down Lenin Avenue, when I was approached by a youth of eighteen or so and three companions.

COMMENT: この when は and then と書き換えることができ、等位接続とほとんど同じである。ただ等位接続より連結性が緊密であるという印象を与える。(成田, 他. 1984)

- (27) (= (19.b)) I was doing the dishes when suddenly in came John.

COMMENT: when in came John という語順には何か意外性が含意されており, ... (村田, 1982)

他にもたくさんあるが、これらが代表的なコメントである。ポイントは二つあり、一つは、when 以下が伝達の中心であり、主節はその背景であるということ。もう一つは、継続用法の when は and then とほぼ同じ意味であり、しいて言えば、and then に比べて連結性が緊密であるかのような印象を与える、ということである。また、継続用法では when の前にコンマを入れる場合と入れない場合があるが、両者を厳密に区別している文法書はほとんど無いといって良い。

この最後の点について筆者が日本の外国語専門学校で英語を教えている母国語話者に尋ねてみたところ、いくつか興味深いコメントを得ることができた。まず、継続用法は会話ではあまり聞かれず、and then が普通であること。また、コンマのあるなしではほとんど意味の違いを感じないということ。それよりも、書かれたものを読む場合、コンマがあった方が分かりやすくて良い、ということ。そして、最後に、これが最も興味深いこと

だが、when に続く内容が劇的あるいは衝撃的であればあるほど、継続用法は好ましく感じられる、ということである。例えば、(28) の例文で、(a) よりも (b)、さらには (c) の方がより好ましく感じられるという。

- (28) a. I was playing the piano when there was a knock at the door.
b. I was watching the TV when suddenly the lights went out.
c. He was walking down the street listening to music on his headset when a car hit him.

この好ましさの度合いは、コンマがあった方が良くというコメントと相互に関係している。つまり、コンマのない継続用法の when は、同じ位置に生じる同時用法の when と見分けにくいのある。従って、それが継続用法であるということをはっきり示す何かがなければならず、それが内容の劇的さや衝撃度なのである。when 節の内容が劇的衝撃的でクローズアップされればされるほど、相対的に主節の内容がかすみ背景化することになる。そうして、継続用法では主節と when 節の動きが、同時用法のそれとちょうど逆になってくるのである。さらにこの母国語話者によれば、(29.a) よりも (29.b) の方が好ましく感じられるという。

- (29) a. I was watching the TV when the lights went out suddenly.
b. I was watching the TV when suddenly the lights went out.

より好ましく感じられる方では、suddenly が when の直後に来ており、when 節で述べられることが劇的な内容であるということのを早めに相手に知らせるという役割を果たしている。また、次のような例もある。

- (30) The other day I was walking from my flat in Tokyo to the local railway station when I happened to pass a group of small children

who were playing by the roadside.

(A.J.Pinnington, *Inside Out*. 三修社)

この例では happened という動詞が、前の例で suddenly が果たしていたのと同じような役割を果たしていると言える。

このように継続用法の when が使われる場合、発話者は when 節の内容が劇的衝撃的であることをいち早く読み手に知らせようと何らかの方策を講じる。つまり発話者の主観が入り込むことになる。(28.c) の when 節に発話者の価値判断を示す unfortunately を加えた (31) のような例文を見れば、主観が入っていることがさらにはっきりする。

- (31) He was walking down the street listening to music on his headset when unfortunately a car hit him.

主観的表現が入るということは、継続用法の when 節はモダリティを有する独立文ということを意味し、この点において、同時用法の when 節後置型と対照的である。その一方で、(31) の unfortunately は S モダリティであるから、その前にある when は D モダリティであり、前の文とのつながりを確保する役割を果たしているという点においては、同時用法の when 節前置型の when と同じである。ではこの両者、すなわち同時用法の when 節前置型と継続用法の when 節の違いは何か。

一言で言えば、それは場面を切り替えるタイミングの違いだと思われる。先に、同時用法の when 節前置型の when の役割は、場面を切り替えて新しい場面を導入することである、ということを見た。ここで継続用法の when による場面の切り替えの仕方と違うのは、同時用法では、場面が切り替わるときに、前の場面がきちんと閉じられ新たに別の場面が開かれているということである。例えば (14) では、三人でいる場面から一人帰って(多分恋人同士の)二人だけが残るという場面に切り替わっている。また (17) では、気が動転してまともに話もできない場面から、落ち着きを取

り戻して話ができるという場面に切り替わっている。さらに (18) では、未婚の状態から結婚後の状態へと場面が切り替わっている。

これに対して、継続用法では、場面の切り替えは突然である。つまり前の場面が閉じられていない状態で新しい場面が開かれている。このことを端的に示しているのは、Quirk, et al. (1985) にも述べられているが、継続用法の when 節の主節には進行形が用いられることが多い、という事実である。(25)~(27), (30) の例文の主節は全て進行形である。また進行形でない場合でも、(32) のようにある期間持続している状態を述べている例が多い。

- (32)a. We had just fallen asleep when the bell rang.
b. I was about to reply, when he cut in.
(Thomson, et al. 1960)
c. I was just about falling into a doze, when he started up from the chair. (Thomson, et al. ibid.)
d. I was in a well-known Paris restaurant late one night when the kitchen door burst open and out rushed a waiter furiously pursued by the chef, hurling abuse at him. (村田, 1982)
e. I wanted to phone Mr. Murata, when I realized that this was Sunday.
f. In fact, he had been thus engaged when the telephone message came from the airport about the mired Aero-Mexican jet which TWA had been asked to help extricate.
(Airport. p40.)

ある状態が続いている時に、場面を切り替えるということは、その新しい場面はある意味突発的あるいは予期せぬ状況であり、劇的衝撃の状況でもある。継続用法の when はそれを知らせる標識であり、when 節の中では、劇的衝撃の状況を読み手に確実に伝えるための工夫がなされているのである。(33) は (29) を再掲したものだが、(33.a) より (33.b) の方が好ましく感じられるという母

国語話者の感想にそれが見て取れよう。

(33)a. I was watching the TV when the lights went out suddenly.

b. I was watching the TV when suddenly the lights went out.

(33.b)の when suddenly は、発話者の工夫を示す複合的主題とも言える。

3.3. ま と め

以上のことをまとめると次のようになる。

(34)①when 節が主節の後に生じる場合、同時用法ではそれはモダリティを含まない純粋に主節の動詞句に含まれる命題成分であり、継続用法ではそれはモダリティを含む独立節である。

②同時用法の when 節前置型と継続用法の when 節は、モダリティを含むという点で同じであり、その役割は、場面の転換という形で、前の文(文脈)とのつながりを確保することである。ただし、前者の場合は、現在の場面を一度閉じて新たに別の場面を開いているのに対し、後者の場合は、今ある場面を閉じずに、新しい場面を開いている、という違いがある。

③継続用法では when の前にコンマがある場合とない場合があるが、両者の間に意味的な違いはない。ただし、コンマがない場合は同時用法と形が全く同じになってしまうので、その分 when 節に発話者は工夫を凝らす必要がある。それは副詞句の前置であったり、要素の倒置であったり、また、述べられている状況が非常に劇的衝撃的なものであったり、と色々である。コンマのない形がコンマのある形より緊密感が増しているように感じられるとすれば、それはこのような工夫の多さのためであろう。

4. 英語教育における意義

前節までに、いわゆる従属接続詞 when について、その文中での位置や働きを基に4つの型に分類し、その特徴をまとめたが、これらはどのように教えていったらよいのだろうか。

(13)の引用は、主題の構成がきちんとなされていないためにメッセージが相手に上手に伝わらない例であった。著者の McCarthy はこの文章を「幼稚で、初級レベルの学習者が手紙やエッセイを書こうとする際に犯しやすい間違いが含まれている」と評し、その原因を「文法知識に乏しく、主題を上手に構成するに足る構文のパリエーションを持たないから」としている。

確かにそうであろう。ただ原因はこれだけではないと思われる。というのも、「構文のパリエーション」という意味での文法知識は(たぶん受験英語のおかげで)十分にあるはずの日本人大学生に自由英作文をさせると、(13)のような拙い文章はごく普通に出来上がるからである。学生に聞くと、外国人教師の英作文の授業などでもこの点は頻繁に注意されているとのことである。つまりこの場合は、McCarthy が言うような文法知識の不足ではなく、構文のパリエーションが文脈から切り離されたところで個々に学習されているので、主題の構成といったことに対する認識が低い、といったようなところに原因が求められると考えられよう。

そこで、このような状態を少しでも改善するために、例えば(14)の引用文の各段落の主題だけを書き出した(16.a)(= (35)として再掲)のようなものを折に触れ生徒に提示して、主題構成の重要性を意識させることなどが必要になってくると思われる。特に、筆者の体験からも、文章の内容に入っていく前に機械的に主題を抜き出し配列するという作業は、主題に対する意識を高め、また文章の理解を容易にする上で非常に効果がある。これは中学校や高等学校のレベルでも無理なくできる学習方法であろう。

(35) There-She-She-When-He-Mel-Tanya-He-Mel-There

そしてこのような作業を数回繰り返すことによって、生徒達が自然に、(10)で示した「効果的な主題の配列の仕方」や、(11)で示した「効果的な主題の選択の仕方」などを、教師からの「難しい」説明がなくても、感じ取っていくことができるであろうということは、想像に難くない。

ただし、教師の資質ということを考えれば、このような漠然とした感覚を持っているだけでは語学教師としては不十分である。当然、(34)でまとめたような文法知識がないと、(35)の主題構成の中のWhenについては十分な(生徒の納得がいくような)説明はできない。日本人が英語が下手なのは文法教育偏重のせいであるという批判を受けて、最近では使える英語・コミュニケーションを重視した語学教育に重点が移りつつある。しかし、かつて文法教育偏重だったのは、コミュニケーション手段としての英語を無視していたのではなく、十分な文法知識があれば後は練習を積み重ねるだけで英語が使えるようになる、という考え方があったためである。この考え方自体には何の問題もない。むしろ今日のコミュニケーション重視の英語教育において、基礎となるべき文法知識がおざなりになる危険性の方が問題であると言えよう。日本においては英語はまだ第二言語ではなく、あくまで外国語であり、その学習にはある程度は意識的な文法の習得が含まれなければならない。そしてその文法はコミュニケーションに役立つ文法であり、そのためにコミュニケーションに役立つ文法指導がなされなければならない。この小論で検証した知識は、そのような文法指導の一つのサンプルとなるはずである。

参考文献

- 有村兼彬, 天野政千代. 1987.『英語の文法』英潮社新社.
- Birner,B.J.1994. "Information Status and Word Order: An Analysis of English Inversion." *Language*. Vol.70, No.2, pp.233-259.
- Bolinger,D.1968.*Aspects of Language*.Harcourt, Brace&World,Inc.
- Celce - Murcia,M.and D.Larsen - Freeman.1983.

- The Grammar Book: An ESL/EFL Teacher's Course*.Newbury House Publishers,Inc.
- Declerk,R.1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- 福地 肇. 1985.『談話の構造』新英文法選書. 第10巻. 大修館.
- 福地 肇. 1995.『英語らしい表現と英文法』研究社.
- Halliday,M.A.K.1967.*Intonation and Grammar in British English*. The Hague: Mouton.
- Hooper,J.and S.A.Thompson.1973. "On the applicability of root transformations." *Linguistic Inquiry*. Vol.4, No.4, pp.465-498.
- McCarthy,M.1992.*Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge Univ.Press. (安藤貞雄、加藤克美(訳)『語学教師のための談話分析』1995. 大修館.)
- 村田勇三郎. 1982.『機能英文法』大修館.
- 中右 実. 1984-6.「意味論の原理」英語青年. Vol.130, No.1 - Vol.131, No.12.
- 成田義光, 丸谷満男, 島田守. 1984.『前置詞・接続詞・関係詞』講座: 学校英文法の基礎. 第6巻. 研究社.
- 大津隆広. 1989.「談話における非制限的關係詞節の機能」『英語学の視点』九州大学出版会.
- Quirk,R.,S.Greenbaum,G.Leech and J.Svartvik. 1985.*A Comprehensive Grammar of the English Language*.London: Longman.
- Thompson,E.1999. "The Temporal Structure of Discourse: The Syntax and Semantics of Temporal *then*." *Natural Language and Linguistic Theory*. Vol.17, pp.123-160.
- Thomson,A.J.and A.V.Martinet.1960.*A Practical English Grammar*. Oxford Univ.Press. (江川泰一郎(訳). 1973.『実例英文法』研究社.)
- 山崎和夫. 1983.「becauseの語順と「ノデ」「カラ」」英語教育. Vol.32, No.6, pp.75-77.
- 安井 稔. 1982.『英文法総覧』開拓社.